

日本医学会分科会活動報告

公益社団法人日本栄養・食糧学会

会長 加藤 久典

I. 医学および医療の水準の向上への貢献が日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会の独自の活動を以下に留意して記載をしてください。

a. 特に学術的に重要と考えられるもの

① 疾病予防に寄与しうる食品、栄養に関する研究

近年、疾病の概念が大きく変わりつつあり、我が国をはじめとする先進国では非感染性疾患が国民の健康長寿を脅かしている。非感染性疾患においては予防が肝要であり、毎日の食事や食事習慣が果たす役割は極めて大きい。本学会では食品の3次機能の解明とそれを活用した機能性食品、特定保健用食品の開発の基盤となる研究が数多く進められており、その後制定された機能性表示食品においても、学術的基盤を形成することにおいて重要な役割を果たし続けている。さらに分子栄養学、時間栄養学という新たな分野をいち早く導入し、年次大会において演題募集の分野に設定し、多くの研究者が参入し、活発な活動を行っている。

② 日本人の食事摂取基準への貢献

国民の健康長寿の実現に向けて5年ごとに見直しが行われている「日本人の食事摂取基準」の検討や策定に多くの会員が関与すると同時に、会員の多くを占めている管理栄養士に向け、その内容や変更事項に関する啓発活動を行い、栄養管理の現場での実践を支えている。

b. 当該領域における国際的な役割

上述の機能性食品の概念は我が国ではじめて形成されたものであり、それを実現した特定保健用食品は、その後世界各国における同様の食品制度に大きな影響を与えた。また、栄養学全般の分野においてもアジア栄養学会議や国際栄養学会議を我が国で開催するなど、この分野において世界をリードする役割を果たしている。

c. 活動からもたらされる社会的な意義

疾患の予防に果たす食品や食生活の役割は大きなものであると考えられるが、その実践に寄与しうる特定保健用食品や機能性表示食品の開発は社会に大きく貢献しうる活動と考えられる。また健全な食生活の基盤となる「日本人の食事摂取基準」の策定と実践における活

動も社会に対して大きく貢献している。

d. 学会運営上留意している点

本学会を構成する会員は医学系の研究者、農学系および家政学系の研究者、管理栄養士であるが、これらの異なるバックグラウンドを持つ栄養学・食糧学研究者を融合し、学術面と応用面の活動をバランスよく進めるための運営を行っている。学会運営の主体となる理事会、社員総会の人員構成に留意しつつ、年次大会のトピックスの選定などにおいても多くの会員が興味を持つ企画を設定している。また、会員相互の交流を活性化することを意識した運営を行っている。

II. 日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会と他の分科会との連携による活動を記載してください。

2016年度の日本栄養・食糧学会大会より、医学系学会との合同シンポジウムを開催することになり、第1回は「糖尿病における食事療法の意義と課題」、2017年度第2回は「動脈硬化性疾患予防のための生活療法」、2018年度第3回は「内臓脂肪肥満とインスリン抵抗性一病態生理と栄養学的アプローチ」というタイトルで、それぞれの学会の立場からご発表いただき、盛況なシンポジウムが開催できた。

2019年度は、日本医学会連合共催事業である医学会連合加盟学会連携フォーラムという枠組みにて、医学会連合から補助をいただきフォーラムを開催した。タイトルは「高齢者糖尿病をめぐる栄養学的課題とその展望」であった。

その後、2020年、2021年は新型コロナウイルス感染症の流行のため大会がオンライン開催となり、2年連続で医学系学会との合同シンポジウムは中止となったが、来年度は開催する予定である。